

INTERVIEW：インタビュー

将棋棋士・日本将棋連盟会長

佐藤 康光_{さん}

「1秒間に1億と3手を読む男」,「緻密流」の異名をとる佐藤康光さんは、数々のタイトルを獲得するなど、長年にわたり将棋界のトップ棋士の1人として活躍して来られました。現在は、日本将棋連盟の会長として、将棋界の舵取りもなされています。その佐藤さんに、空前のブームに沸く将棋の世界のお話を伺いました。

(聞き手・構成：伊藤敬史, 小峯健介, 鈴木啓太)



——将棋を始めたのはいつ頃でしょうか。

小学校1年生の時です。友達が小学校に将棋盤を持ってきました、それを見て覚えたのがきっかけです。

——どのようなところに将棋の魅力を感じましたか。

勝負がはっきり付くところが魅力の1つだと思います。あとは、自分の力で勝ち切れるという、1対1で勝つ魅力というのがあったのかもしれない。

——棋士にとって必要な要素はどのようなものでしょうか。

常に好きで居続けられる気持ち、常に情熱を傾けられることが大事だと思います。もちろん将棋自体の技術的な才能や精神的な強さも重要ですが、将棋の盤面は変わらないわけですから、飽きが来てもおかしくないわけです。私は将棋を始めてから飽きを感じたことは一度もありませんので、一番重要なことは、変わらぬ気持ちを持ち続けられることだと思っています。

——佐藤先生は、中学1年生の時にプロ棋士の養成機関の奨励会に入られたわけですが、同期には羽生善治さん、森内俊之さん、郷田真隆さんなど、いわゆる羽生世代と言われる錚々たるメンバーがいらしたわけですね。その時の奨励会の雰囲気はどうでしたか。

私は最初関西でしたが、みんなどんどん上がってきますので活気がありました。その中で自分も刺激を受けて負けたくないという気持ちが自然に湧き出てきましたので、環境として恵まれていたと思います。

——お互いに奨励会時代から今まで何十年と切磋琢磨し合ってきたと思うのですが、羽生さんや森内さんは、佐藤先生にとってどういう存在ですか。

羽生さんは常に先頭を走っている存在ですので、同世代ですけど目標の部分がありました。タイトル戦でも100局以上対局していますし、公式戦で私が一番多く対局している相手です。そういう意味では自分を引き上げていただいている棋士の1人かなと思います。

森内さんは、昇段ペースやタイトル数も似ていて、一緒に上がってきたというところがあります。そういう意味ではライバルと言えるかもしれません。

——先日、通算1000勝を達成されまして、おめでとうございます。それだけの年月があつてのことで非常に重みのあることだと思うのですが、振り返ってみていかがでしょうか。

1000勝が歴代9人目とのことで、達成したのは偉大な大先輩ばかりですので、その名を汚さないように

とは思っていますけれども、振り返ってみるとあっという間というのが正直なところですね。1局が終わると次の対局に向けて準備をしますので、昔のことを振り返るということはあまりしないんです。

—— 棋士の生活について教えてください。対局は年間で何局ぐらいあるのでしょうか。

これは様々です。全棋士の年間平均対局数はだいたい30局ちょっとだと思います。上の方で活躍している棋士は50局ぐらいです。

私は今まで年間対局数で一番多かったのが2006年度の86局です。タイトル戦だと地方で2日制の対局もあって、移動日を入れるとその前後4日間ぐらい取られてしまうことになりますので、86局に要するのが86日というわけではないんです。月別で言うと2月に13局対局したことがありましたが、その時は、ほぼ1カ月移動か対局だけでした。逆に負けると1カ月対局が何もないときもあるので、勝敗によってかなりばらつきが出てきます。

自分が勝つと思って対局の予定を入れていますけど、それが負けると全部なくなってしまうので、対局に負けるとオフになるような感じです。だから棋士はオフがない方がいいですね。

—— 棋士は対局以外の日はどのようなことをなさっているのでしょうか。

基本的に次の対局の準備の時間が圧倒的に多いですが、それ以外に、例えば、教える仕事をしたり、本を執筆したりという仕事をされている方も結構います。あるいは、準備の一環として仲間同士で研究会をします。対局以外の仕事はあまり行わないという棋士もいますし、人に教えるのが好きなのでそちらを中心にやっているという棋士もいます。それは結構個人差があります。

—— 対局への臨み方を伺いたいのですが、対局の前日の過ごし方で気を付けていることはありますか。

前日はあまり将棋のことを考えないようにしています。今は役員をやっていて、あまり自分の時間を取れないので、前日に勉強をすることが多いですけど、以前は、対局の前日に研究を突き詰めて、逆に新しい課題が出てしまって眠れなくなってしまうというケースが結構あったので、前々日ぐらいまでにある程度研究を済ませて、前日は基礎訓練ぐらいにして考え過ぎないようにしていました。

—— 対局中に心掛けていることはどのようなことでしょうか。

対局中は自分の力を出し切れる戦い方を考えています。プロ同士の対局でも自分の力を発揮できなくて負けてしまうというケースも結構多いんですね。あとは、自然体でいるようにしています。「落ち着け、落ち着け」とか言っていますと逆にそれがすでに普通の状態ではないですから。昔は気合を入れなきゃいけないという意識を持っていたこともありましたが、今はあまりそこまで一喜一憂せずに対局できる感じになっていますね。

—— 現在の自然体を身に付けたのはいつ頃でしょうか。

40代に入ってからだと思います。他の人にはない部分がないと勝ち抜けませんので、強い棋士には普通ではない部分が必要になってきます。そうはいっても精神的には自然体でいるところは必要なと思います。

—— 20代の頃と比べて、年齢的に発想が変わってきたようなことはありますか。例えば、羽生さんのご著書には40代に近づいてきたころから大局観で考えるようになったというような記載がありますが。

基本的に棋士の強さの根源は読みだと思うんですね。ちょっとした違いをいかに正確に読んでいくかというところが強さだと思います。当然、弱いうちは誤って読むわけですが、その繰り返しによって、少しずつ勘が磨かれるといいですか、感覚が身に着いていく。それが大局観なのだろうと思います。つまり、

読みをひたすら繰り返すことによって、だんだん自分なりの基準が出てきて、その積み重ねで自分なりの大局観ができてきますので、そういう意味では年を経て出てくるものもあります。

将棋は、結構例外が多いゲームです。セオリーが山ほどたくさんあるわけですが、それはあくまでも部分、部分のセオリーであって、それが盤面全体で考えてみると当てはまらないというケースが結構多いのです。部分、部分のセオリーは知っていても、それをいろいろな基準で判断できなければいけないので、そういう難しさはあります。例えば、よく最初は玉を囲いなさいと言いますが、プロの将棋で全然囲っていないこともあるわけです。それは全体を見てそうしているわけです。

手を読んだり、いろいろなことを考えたりした経験を少しずつ活かして、何となくこれは何とかなりそうとか、これはだめそうだなという判断になってくるわけです。その理由は必ずしも1つだけではなくて、多いときはかなりの数になりますけど、複合的な理由が重なったときに、それを直感的に判断するのは経験から来るものかなと思います。

——その読みについて、佐藤先生は「1秒間に1億と3手読む」と言われていますけれども、先を読む力というのはどのように養われたのでしょうか。

私の場合は好奇心という面が大きいですね。何か面白そうだなと思って考え始めて、読みが進んでいったというケースが多いように思います。ただ、もちろん嫌な局面でも読まなきゃいけないわけですよ。自分にとっていい将棋を勝つばかりでは勝ち残れませんから、悪い将棋を逆転しなきゃいけないわけですけども、その逆転する要素として相手に悪いときも差を広げられずに付いていくということが非常に大事になります。これはプロ棋士でもなかなか難しい作業です。

プロの対局でも悪い方がさらにミスをして差を広げられて負けるというケースが結構多いんです。差を広げられずに付いていく作業ができる棋士が強いといい

ますか、それができないとなかなか生き残れないというのはあります。勝率の高い棋士でも4割とか3割は苦しい将棋が出てきますので、そこでどう踏みとどまるかということだと思います。

——日本将棋連盟では、将棋の魅力を普及するための活動として、どのような活動をされているのですか。

メディアを使った活動や、イベント、将棋教室、将棋大会等が主です。最近では映画の『3月のライオン』とか、藤井聡太四段の活躍でかなり関心が高まっていますので、これらの広報活動も行っています。

——最近将棋ブームになっていると実感されますか。

特に今年（2017年）の夏は、将棋のイベントや大会が数多く催されたんですけど、例年以上に参加希望者が増えています。そういう意味では多くの皆さんに関心を持っていただいていると思います。

あまり将棋を知らなくても、棋士の食べ物とか、棋士の人となりに関心があって将棋を観戦する「観る将」の方も増えていらっしゃるですね。いろいろな側面から将棋に関心を持っていただけるということで、非常にありがたいことだと思います。

——藤井四段が新人として29連勝という記録を作られましたけど、藤井四段の活躍についてはどのように受け止めていらっしゃいますか。

将棋界への関心が非常に高まりましたので大変ありがたいことだと思います。でも正直そこまで勝つとは思いませんでした。勝ち負けの確率を2分の1で単純計算すると、29連勝は約5億3600万分の1ですので、考えられないことが起こったという感じです。将棋が強いだけではなくて、受け答えの面でもちょっと中学生離れしているところがあって感心しています。

——藤井四段の活躍で20代の棋士が奮起をしているという面もありますか。

そうですね。20代前半の棋士が追いかけてい

るという意識を持つというのは今まであまりなかったと思うんですね。藤井四段の出現で危機感が芽生えて、今年に入ってから20代の勝率が飛躍的に上がっている気がしますね。今年に入ってから棋王戦、名人戦、棋聖戦、王位戦、王座戦と20代が挑戦者になっていますが、全部異なる人が挑戦者になっています。誰か一人が抜きん出ているというわけではなくて、非常に層が厚いので、これからより競争が激化していくことが考えられますね。

—— 業界全体として楽しみですね。

そうですね。これからどの人が天下を取っていくのか、時代を作っていくのかみたいなことが1つ見どころになりますかね。今までだと谷川浩司先生がいらっしゃって、羽生さんがいて、渡辺明さんがいますけど、それに続くような20代の棋士が出てくるのかということですね。いきなり藤井さんがそれを抜いてしまうのかも関心の一つかなと思います。

—— AIと棋士の方の将棋の違いはどのようなところにあると感じますか。

AIの指す手については、なるほどと思う部分もあるんですけど、「えっ？」と思う部分もかなりありまして、そのギャップがかなりあります。若手棋士を中心にAIの指し方を部分的に取り入れていることもあるんですけども、一局全体としてみると、まだ私にはわからない部分が多いです。

ソフトもまだまだ強くなれるという開発者のお話もありましたが、逆にいうとソフトも解明していない部分があるわけで、それだけ将棋が奥深いということをやソフトから教えていただいている部分があるのかなと思っています。

—— 今年の電王戦で佐藤天彦名人がAIに2連敗をしましたが、AIに敗れたとしても、人間同士が指す将棋の魅力というのは別にあるように思います。人間が指す将棋の魅力はどのようなところにあるとお考えですか。

将棋というのは非常に逆転の多いゲームで、野球だとランナーなしでホームランを打たれると1点取られるわけですが、将棋の場合は一手指しただけで1000点ぐらい取られてしまうケースがたまにあります。逆転の起こりやすい将棋というゲームで、勝ちに至る過程が無数にある中でいかに勝ちをたぐり寄せるかというところは人間ならではの魅力だと思います。

例えば、最短距離で勝ちを目指す指し方には当然大きなリスクが伴うわけですが、安全に勝つとして確率の高い手を選ぶと戦いが長期化してミスをする可能性が高まりますから、どちらにもリスクがあります。そういう選択には、棋士の人間性や棋風の結果が現れてきますので、より個性あふれる戦いをお見せしていくということが大事なだろうと思っています。

—— 最後に今後の目標をお聞かせいただけますか。

将棋連盟会長としては、将棋連盟の運営を安定化させるということ、また、藤井四段のブームなどで将棋に関心を持っていただく方が増えていますので、そういう方にさらに将棋の魅力をお伝えできればと思います。さらに、2020年には東京オリンピック、パラリンピックがありますので、そういう中でも将棋を日本の伝統文化として発信していけるような方策を行いたいと思っています。

棋士としては、まだまだ実績を積み重ねられるように精進していきたいなと思います。年齢的には将棋界ではかなり年長になりますので、年下の棋士との対戦がほとんどですけども、その中でも存在感を発揮できるような将棋をお見せしたいと思っています。

プロフィール さとう・やすみつ

1969年生まれ京都府出身。将棋棋士(九段)。田中魁秀九段門下。タイトル通算獲得数13期(竜王1期, 名人2期, 棋王2期, 棋聖6期, 王将2期)は歴代7位。永世棋聖の資格を保持。2011年4月から2017年1月まで日本将棋連盟の棋士会長。2017年2月から日本将棋連盟会長。2017年4月紫綬褒章受章。